

夏休みの貴重な体験

城星学園中学校 3年

私は、この夏休みに保育士体験をしました。当日の朝、私は期待と不安というより、緊張して、胸がはりさけそうな思いで、保育園の門をくぐりました。この不安を解消してくれたのは、唯一、同級生の友達がいたことでした。その保育園は、一番下は0歳から一番上は六歳までの子どもたちの笑い声と泣き声であふれていました。その中で、若さあふれるこの中学3年生にむかって、あるおこちゃまの第一声は、なんと「おばちゃん！」と言われ、私は、誰のこと？と思いつつも、「私のことやん！」と気づき、友達と思わず苦笑い。4歳の子からしたら、私たちはもうおばちゃんの領域に入りつつあるという衝撃、私はショックでした。そんなことがいきなりありながらも、私は、1歳の子達を担当することになりました。教室に案内され、目にとびこんできたのは、おとぎ話に出てくるような小さなイスと小さな机でした。その机とイスが大きく見えるほど、小さくおさまっている子もいれば、どしっと偉そうに座っている子の中で、私は保育士体験の第一歩がはじまりました。

引率の先生と運動場で遊ぶことになり、暑い中なのに、子どもたちのパワーはすごいです。何をするのも全力で、手をぬくことをせず、なんでも遊びに変えてしまいます。ふと気がつけば、1歳の子と普通に遊んでいる自分に笑えました。そして、心配している時間がついにやってきました。それは給食です。私は給食にいい思い出がありません。ましてや牛乳は大嫌いでした。でも、子どもたちにとってはスペシャルタイムで、待ちきれず机をたたき子、フォークとスプーンをならす子。メニューはハヤシライスとサラダとフルーツと牛乳でした。私にとってもスペシャルな時間になりました。なんと、私は牛乳がなかったのです。

子どもたちの仕草や行動は、かわいくて、かわいいの一言では片付けられないぐらい、やはりかわいくて、だっこした感触は思ったよりも重く、どしっとしているのですが、全身がマシュマロのようにやわらかかったです。お昼寝タイムの寝顔は、天使のような寝顔の子もいれば、思わず笑ってしまう寝顔もありました。私も「寝たい」と思いながらも、忙しく働いていました。一日目はあっという間に過ぎてしまい、保育士の大変さを全身で感じながら、正直、すごく疲れましたが、貴重な時間を過ごすことができました。

私の幼児期を思い出しながら、今日の体験を通じて、私なりに考えさせられたことがありました。0歳児の子が預けられていることに内心驚いていました。0歳児の子が一日の大半を家以外で過ごすことに、不思議な思いをしました。先生達は、忙しくて大変でしたが、子どもたちの笑顔と、あふれんばかりのパワーをもらって、頑張っておられる姿はカッコよく見えました。私もこの体験を通じて、できれば人と関わる職業に就きたいと思いました。